

南メソポタミアから見たウルク・ワールド・システム

前川和也

Kazuya MAEKAWA

The Uruk World System Reviewed from Southern Mesopotamia

前4千年紀の後半に南部メソポタミア文化（ウルク文化とよんでよいであろう）が、とおくシリア、アナトリア、イランに及んだことはまちがいない。ハブーバ・カピラ南などは、ウルクの植民都市として建設されたと断定してよいであろう。けれどもそれを、G. アルガゼのように「ウルク・ワールド・システム」の所産とみなしうるかどうか。

I. ウォーラステインは、人類の歴史には多くの「世界システム」を見いだすことができるが、それらは「世界帝国」と「世界＝経済」に2分できるといふ。いうまでもなく、西ヨーロッパが16世紀になってはじめて作りあげた「世界＝経済」に、ウォーラステインの議論の核心がある。いっぽうアルガゼは、「世界帝国」という政治統治システムにかならずしも依存しない「インフォーマル」な経済支配もありうるというウォーラステイン批判を紹介し（Algaze 1993: 9）、さらにはいわゆる「インフォーマルな帝国」概念で、前4千年紀中葉から後半にかけての「ウルクの拡大」を説明することの問題性をも指摘している（Algaze 1993: 115-117）。けれども、ここまで来れば、ただちにウォーラステインをイメージしてしまう「世界システム」の語を、なぜアルガゼが用いるのか、よく理解できなくなってしまう。もしアルガゼが、「世界＝経済」にたいする「世界帝国」というウォーラステインの概念装置を完全に捨てざるというのであれば、アルガゼはかつてのように「ウルクの拡大」という語のみを使ったほうがよいのではないか（Algaze 1989）。

これに深く関連することであるが、アルガゼは、「コア」たる南部メソポタミア、ウルクにおける社会組織の進化の度合いについての議論をほとんど行っていない。「コア」がはっきりしないままで、「ワールド・システム」を論じるというのは、いかがなものだろうか。そして少なくともアルガゼが扱った時期のウルクで、強力な政治組織がすでに完成していたかどうかは、まだよく分からない。おそらく、伝統的な立場にいる研究者の多くは、そのような立論を否定するであろう。

「ウルクの拡大」はウルク期の終了とともに崩壊するというのであろうが、ウルク期の終了直前になって（Eanna IV a）、はじめて粘土板文字記録システムがウルクに生まれる。そしてエアンナ聖域地区では、ウルク期とつぎの時期（Eanna III）とのあいだには、「神殿」建設にかんしておおきな断絶がみられるにもかかわらず、文字記録システムは、

エアンナIII層の時期にさらに連続的に大発展をとげる。つまり、粘土板記録システムは、「ウルクの拡大」が終わったのちのウルク都市の内的発展の帰結として成立したのであろう。逆に、粘土板記録システムに示されるような内的発展がすでにウルクに以前からおこっていて、それが「ウルクの拡大」を生み出したとは言えないようにみえる。なお、まちがいでなく、ウルク粘土板記録システムは、大組織の内的管理のために発明されたのであって、遠隔地「交易」を記録するために成立したのではない。

これに関連して注意しておくことは、アルガゼの「ウルク・ワールド・システム」論と関連してしばしば持ちだされるコンプレックス・トークンの問題である。たしかにコンプレックス・トークンは、粘土板記録システム出現の前夜に、ウルクやイラン、シリアなどで用いられていた。そしてD. シュマント・ベセラは、コンプレックス・トークンは、シリア、スサなどから南部メソポタミアへ「貢納」、「税」として物品が送られるさいに用いられたと述べている（Schmandt-Besserat 1992: 182-183）。もしこれが正しければ、われわれはある種の広域的な政治組織（帝国？）を考えざるをえなくなり、「ウルク・ワールド・システム」論もよほど違ったふうを受けとめることができる。けれども、シュマント・ベセラの論が成り立つという証拠は、なにもない。なおコンプレックス・トークンについては、彼女よりはるか以前に、交易とのかかわりあいを想定したアミエラの立場にたちかえったほうがよい。

シュメール語粘土板史料を扱っている研究者にとって、「ウルクの拡大」論がたいへんに興味深いのは、ウルク文化が及んだとほぼ同じ範囲に、シュメール行政・経済記録を用いる文書行政システムがひろがったのかもしれないと仮説できるからであるし、また前3千年紀後半のアッカド王朝の支配も、ほぼ同じ領域に及んだとも考えられるからである。書記養成に用いられたと思われるシュメール語官職リスト（いわゆる Early Dynastic Lu-Lists）が、おそらくアッカド時代にはエブラ（Ebla）、スーサ（Susa）、ヌジ（Nuzi）にまで普及していたことが、そのことを考えるヒントになるであろう。

アルガゼ著『ウルク・ワールド・システム』に本格的に言及した唯一のメソポタミア文献学者は、ハーヴァード大学のP. シュタインケラーである（Steinkeller 1993）。シュタインケラーは、サルゴンのアッカド帝国が成り立ちえた

背景として、初期王朝期はじめから北メソポタミア地方一帯にセム人の強力な領域国家が成立していたこと（「シュメール王朝表」でいうキシム第1王朝およびその後継者たち）、それ以前、前4千年紀後半にウルク文化が北メソポタミアその他の地域にひろがっていたこと（ウルクの拡大）、そしてさらに「ウルクの拡大」に先立って、ウバイド文化の拡大があったことをあげている。シュタインケラーは、ウバイド期にシュメール人が大量に北メソポタミアに植民していたとさえいう。いずれにせよシュタインケラーのアルガゼ批判は、わたしのそれとほぼ同様であって、政治的な権力が未成熟な「中枢」を想定せざるをえない「ウルク・ワールド・システム」論は、やはりおかしいというのである。シュタインケラーは、「ウルクの拡大」は純粋に経済的なもの

のであったと考えている。

引用・参考文献

- Algaze, G. 1989 The Uruk Expansion. Cross-cultural Exchange in Early Mesopotamian Civilization. *Current Anthropology* 30: 571-608.
- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Schmandt-Besserat, D. 1992 *Before Writing, Vol. I: From Counting to Cuneiform*. Austin, University of Texas Press.
- Steinkeller, P. 1993 Early Political Development in Mesopotamia and the Origins of the Sargonic Empire. In M. Liverani (ed.), *Akkad. The First World Empire: Structure, Ideology, Traditions*, 107-129. Padova, Sargon srl.

京都大学人文科学研究所

Institute for Research in Humanities, Kyoto University